

海拔39メートルに津波避難所

筑波大下田臨海センター 独自整備、住民ら確認

東日本大震災の甚大な津波被害を受けて、下田市五丁目の筑波大下田臨海実験センター（稲葉一男センター長）は施設内に、新しく津波避難場所を整備した。お披露目を兼ねて13日、センター関係者や地域住民、市職員ら約60人が避難経路を歩いて確認した。

「海水浴客にも対応」

同センターは大震災以前から年1回の避難訓練を行ってきたが、避難場所が海拔約10メートルだった

ため、大学に見直しを要請。狼煙（のろし）山の尾根

の海拔39メートル地点を新しい避難場所とし、半年掛けて整備して昨年度末に完成させた。

第2研究棟近くの登り口へは3カ所の避難経路がある。新設した50段の階段を上り、傾斜路を進むと200人収容を想定した広場に着く。広場か

らは国道にも抜けられない。お年寄りなどに配慮して道に手すりを付けたが勾配がきついため、約150メートルの距離を息を切らして登る人が目立った。鍋田地区はこれまで元農協選果場と切り通しの2カ所を避難場所にして

いたが、鍋田浜から距離があるため海水浴客の避難に不安があった。嶋津安則・広岡西区長は「課題だった海水浴客の避難場所にも対応できるように、利用度が高まる」と選択肢が増えたことを喜び、近くに住む大隅武夫さん（64）は「地域にとってはうれしい話。新しい避難場所ができて本当によかった」と話した。

「次の避難訓練では地元住民にも声を掛け、周知したい」と稲葉センター長。今後は夜間にも対応できるように照明を付けたら、広場に非常食や防災グッズを備える防災倉庫を置く予定という。

